

◎ 連合会だより

10月20、21日の両日、東京で第1回のケアワーカー(ホームヘルパー)交流会を開きました。100人をこえる参加者は、9月14日の東京高齢者協同組合設立、神戸の全国11番目の兵庫高齢者協同組合の設立の熱気を受け継ぎ、それぞれの思いを持ち寄り「すごい」集まりになりました。

なんとといっても、ケアワーカーが高齢者協同組合の要であり、生活、地域のコーディネーターという位置にいる。対人サービスという今後の経済の発展の主要部分を担うケアワーカーの社会的地位高め、公共性と公益性をしっかりと主張し、自立支援のネットワークを確立していくこと。他人の命に出会いその命を輝かせ、そのことによって自分の命も輝く、対等平等な人間関係があってこそできる人と人の命の尊厳を守り、その活動を通じて自らも成長することといったことが参加者にしみわたった集まりになったと思います。

◎ センター事業団だより

紅葉の季節真っ盛り。その後に待ち受ける冬はモノクロなイメージだが、今の世情の中で、モノクロが「暗い」のか「シンプル」なのかは、ひとえに自分の心と体の現在地によるものだと思う。果たして今年はどうな冬なのか?いろいろな意味で自分自身に興味がわくと共に、立ちすくみ、回りを見渡し、歴史を振り返り、自分の位置を確かめてみるのも大事なようだ。

5回目となった全国代表者会議が先日2日間開かれた。総代会とは違って、多くの組合員の思いや悩み、苦労や喜びがほとぼしるように語り継がれ、「自分たちの事業・運動・組織」へといざなってきたこの会議は、いろいろな意味で脱皮の時期を迎えたと実感させるものとなった。初めての「仕事おこし」の先進事業所による「パネルディスカッション」は、準備不足もありながら深みを示したし、条件の違いを越えて「仕事おこし」の可能性や確信を放った。また、川田悦子さんの講演は、生命や社会や地域が誰のものなのか、誰がつくり

高齢者協同組合の発展のキーを握るのがケアワーカーであることがはっきりしました。全国で530人がケアワーカーとして労協で働いており、養成講座を受けた人は500人をこえています。集会では、1万人のケアワーカーの養成と組織をめざすことを決めました。

この集会での池上先生の講演は、保育、障害者の仕事おこしと協同にかかわってただけに、参加したケアワーカー、そしてわれわれにとって大変な励ましになりました。年頭の研究所の研究会での「労働者協同組合の公共性」という講演、前段の「仕事おこしのすすめ」、そして近著「現代経済学と公共政策」とひとつひとつが応援団を構成しています。労協法での強力な応援団の宮坂先生、また「かくれ」応援団も含め共感の広がり心新たにしています。

鍛谷 宗孝(労協連合会・専務理事)

守るのかを真正面に据える勇気と、その事のもつ当たり前だった「価値」を捉え直す機会となったように思う。社会の雑踏の中で、忘れそうになる「自分」や「生命」への回帰。そもそもいつから社会は雑踏にまみれ、自分を見失う場となってしまったのか。この事から我々の事業や運動・これを支える組織は文化を形成していかなければならない時期に来た、ということだろう。

まだまだ先と思っていた協同集会も目の前。最後の追い込みを「出会い」と「生命の営み」を再発見・再評価する場として全力をあげたい。その事が自分に水を与え、社会に肥やしをまき、力強い「生命」の再生の土を育むだろう。「協同」の光を全身に浴び、心にこびり付いた多くの邪や愚や虚を洗い流し、「生命」が力強く胎動する、そんな今年の冬にしたい。

古村 伸宏(労協センター事業団・事務局長)